あり，それを総括できる科学の方法がない限り，技術は無価値だとする考えに立つ。

実は自然農法の基本的精神についてはまだ理解しがたい点がある。自然農法の使命は現代の科学文明の行きづまりを打開することで，人間はただ生きるだけで幸せがある，何もしなくてよいことを知るべきだと説くのは，禅の精神につながるように見える。しかし科学が自然界のあらゆる現象を解明できていないからといって，また科学技術が公害という副産物をもたらすからといって直ちに「科学者は自然がいかに完全無欠であり，神秘な世界であるかを知るべきだ。人間は自然の力にすがってさえいれば生きられる」という考え（信仰）をみとめ，自分も自然農法をやってみようという気にはなれない。

しかし非常によくわかる論法は，人間が病気にならない環境を作れば薬は不用になるのだという点。現実は病気になる環境を人間が作っておいて，薬の有用性をといている。教育しなければならない世の中にしておいて，教育の価値を主張するのは間違っているというのが教育不要論の根拠で，これも自然農法の主唱者の哲学から導かれる論法だ。この場合の教育とは，学校における仕組まれた集団教育のことをさすのだろう。ともかく人間も自然に生き，育ち，のびる能力をもっているはずで，それを自然にのばすのが自然教育法とでもいうのであろう。

レニングラード駅

― ソ連旅行スケッチ ―

式　　正英

モスクワのレニングラード駅とは何のことだと思うだろう。東京の東京駅，大阪の大阪駅は夫々の都市の中心駅である。上野駅も新宿駅も地方に向う鉄道の始発駅だが，駅名は駅のある場所の地名を採っている。ソ連の都市では主要な始発駅の名付け方が全く異っている。モスクワの環状道路の外側に沿って，カザン駅，レニングラード駅，リガ駅，キエフ駅などが配置しており，いずれもこれらは行先地の都市名を冠して駅名としたものである。同じようにレニングラードの街には，南にモスクワ駅があり，北にフィンランド駅がある。この呼び方は日本の常識からは間違いをおこす原因を醸すように思えるが，使い馴れてしまえば却って便利のようでもある。上野駅で中央線の列車を待ったり，新宿駅で東北線を探したりする無駄は防げるからだ。

1976年8月4日午前1時に，カレリアの主都ペトロザボーツクへ向けて出発する列車に乗ることになって，夜の11時にロシア・ホテル東口に集合した。国際地理学会議の諸行事はその一時間前に終了したばかりの時刻であり，その夜の部屋代1万5千円を払いこみ済みなのだから，ゆっくり朝まで寝かせておいて貰い度いのが私共の生活の常識なのだが，そうは行かない所がお国柄なのだろう。会議後の巡検旅行を申込むときは行先地と，予定日数以外は何も知らされていない。8月4日出発は判っていたが，午前1時発はモスクワについてから知らされ，意表をつかれた思いであった。クレイムをつけた所で午前1時は8月4日のうちだという言い分がはね返って来ることは判りきったことであった。とも角，集まった面々は合わせて11名，東西ほぼ半々の構成で，長老格のルーマニアの地形学者ポップ教授は，「これでも四大陸参加のミニ・コングレス・ツアー」だと嬉しそうに評した。

深夜のレニングラード駅では列車の出発まで1時間半も待たねばならなかった。上野駅の改札口前の屋内広場のゆうに2倍もあろうかと思われる広い方形のアーケードは，乳白色の石造りで，モダンで立派で，螢光灯に輝いてまばゆい程である。正面に大きなレーニンの胸像があるのが唯一のお定まりの装飾である。アーケードの終る所は，屋根のない暗いホームに通ずる入り口になっている。その付近の壁側の石の棚には，疲れ切った表情の家族連れが沢山，居眠りをしたり，横になってねむりこんだりしている。この深夜の駅の光景は，どこの国の始発駅，終着駅にも共通であり，人間模様曼陀羅の図柄である。商店や物売りなど殆んどみられないのは，日本でのはでばでした広告にうんざりしている者としては，清潔ですっきりした感じを受けるが，物足りなさと不便さも否めない。深夜の駅頭には，片隅で固パンのようなロシア菓子が少しばかり売られているだけであった。

立ったまゝ話すのにも疲れた頃，プラットホーム横に停っているバスの中に，待合室代りにと案内され，暗い椅子に坐りこんだ。折悪しく雨がそぼ降り始め，とてもはしゃぎ華やいだ旅立ちとは縁の遠いものとなった。旅先の思い知れぬ，漆黒の闇が往く手に立ちはだかり，心もとないやる瀬ない印象で，ロシア文学に画かれて来た背景が，ひしひしと感じられた次第である。

「雑　　感」

井内　昇

過ぎてしまえば1年も短く感じるものだが，それにしてもこの1年間は短かったと思う。大学での春夏秋冬をひとわたり経験しての卒直な感想は，「大学とは忙しい所だ」ということである。と言っても，大学とは暇な所と思って来たわけではない。授業等の拘束時間だけでいえば，役所より遙かに短いことはいうまでもないが，それにも拘らず「忙しい」と感じるのは，大学での仕事はむしろ拘束時間以外にあり，それが役所の勤務時間のような明確な始めと終りを持たないから，何時も仕事のことが頭を離れなかったためであろう。大学の仕事の単位が原則として個人で，その範囲は時間も含め自分で決めなければならないとすれば，そのメリットを生かす方向で早く順応する他はないだろう。今はまだ授業以外の諸役は殆ど引受けていないが，今後はそのような仕事もふえるものと覚悟している。

この1年間で，授業を介して一応1年から大学院2年までの全学生諸君と接することができたが，予て聞いていたようによく勉強する（学年別に若干差があるのも面白い）のには感心する。また，学生諸君が礼儀正しく素直で明朗なこともこの大学の特色なのだろう。

お茶大は他大学に比べれば極めて小規模な大学であるが，市古学長も指摘されるように，それは現在の日本の大学事情の中では得難い利点である。大学のマンモス化によるマイナスが問題になっている現在，この良さは今後も失いたくないものだ。大学とは本来教師と学生，学生相互の全人格的な交流を中心とする教育の場であり，そのためには小規模であることが必要なのだが，その反面，小規模であることは交流の幅を狭くするマイナスにもつながる。大学内で学部，学科の枠をもつと緩くして全学的な交流の機会をひろげることは出来ないだろうか。